

駆け引き婚のはずが、イジワル御曹司に
溺愛攻めされています

神城 葵

Aoi Kamibiro

目次

駆け引き婚のはずが、
イジワル御曹司に溺愛攻められています
出会いと初恋

書き下ろし番外編

家族のかたち

駆け引き婚の**はずが**、

イジワル御曹司に溺愛攻めされています

1

「一年後までに結婚するのは絶対。先に好きになった方が相手に従う。これでどうだ？」
 「いいですよ、それで。あ、好きって人間的に尊敬できる人とかじゃなくて恋愛、男女としてってことよね？」

「そう。あと、好きになったら正直に自己申告することもな」

「そこは『好き』って言わせたらいいと思う。隠すのも暴くのも手腕の一つだし」

現在、私と彼の視線は熱く絡まっているが、しかし恋愛の甘さはない。

「とにかく、先に恋に落ちた方が負け！」

ほぼ同時にそう言って、私たちは同じ内容を記した誓約書にサインして交換した。

……どうしてこんなことになったんだろう、と今日再会したばかりの相手を見て、私はそつと溜息を堪えた。

チープなパイプ椅子と会議用長机が置かれ、申し訳程度に花が飾られた地味な部屋。

実用的と言うと聞こえはいいけれど、公共会館の一室ではこのくらいが限界なんだろう。

ここで行われているのは、自治体主催の地味で安価な婚活パーティーだ。

パーティーというのも憚られる、どちらかといえば顔合わせのようなこの催しに参加しているのは、男女問わず、私のように「もう後がない」人が多い。

私、穂積美月^{ほづみみづき}は二十五歳。これは一般的には「後がない年齢」ではないかもしれない。

そう、一般的には。

しかし我が家はちょっと普通ではないので、私には後がないのである。

そろそろ結婚を、と匂わされたのは大学を卒業する頃までで、去年あたりからは「いい加減に結婚しろ」という圧力に変わってきた。仕方なくいろんな婚活パーティーに参加してみたがなかなか相手が見つからない。

私の条件は「清潔感があって価値観の合う人」——これだけなら、合致する人はそこそこの数がいた。でも、お試し交際一回目で「申し訳ないけど、今回はなかったことに」とお断りされるのだ。

それも当然だ。本来なら二人で会うべき初回の顔合わせに両親がついてきて、開口一

番「婿入りしてくれるんですね？」なんて言われたら、大抵の人が逃げたくなくなるだろう。

そうこうしているうちに、父が「婚活などしなくても見合いをすればいい」と言い出した。もちろん、「婿入り前提」の見合いだ。

私の家は代々、穂積神社の宮司ぐうしを務めている。室町時代から五百年以上続く我が穂積神社は、それなりに氏子もいて、更に社格も高い。そんな家に一人っ子として生まれてしまったものだから、両親は私に婿取りを熱望しているのである。

私自身は、この家——はまだしも、神社からは逃げたい。理由は単純で、私はホラーが苦手なのだ。お祓いを申し込んでくる人が持ち込むモノ——こんなことを言うのは子どもっぽくて恥ずかしいけれど、私は霊がとても怖い。

しかも由来や不幸事を聞いてからお祓いをするのだから——いつか私がこの神社を継いだら、それをしなくてはならないというのが怖くて仕方ない。夫となる人が代わってくれたとしたら、たぶんその日は夫に近づくのも怖いだろう、という程度には怖がりである。

だから婿取りではなく嫁入りして、この家から逃げたいのだ。神社は私じゃなくても従兄弟が継げばいいのに、そうはしないで自分の血統にこだわる父にも呆れる。

父はどうしても私かその夫に跡を継がせたいようで、お見合いの話をいくつも持って

くる。その度に「まだ結婚は考えていない」とかわしていたのだが……ついに先日「交際相手もないのに、そんなことを言っていられる年齢でもないだろう」と言われてしまった。大学を出てすぐ結婚した両親は、二十代での結婚を当たり前だと思っている。一体なんて時代錯誤な親だろうか。

そういつたわけで、私は自力で「嫁入りさせてくれる人」を探している。友人たちからの紹介は既に全滅した。高価な会費を取るパーティーよりも、こういう自治体主催のものもいいかもしれないと思って参加したけれど、女性陣はまだしも男性陣は父親に近い年齢の人が多くて、まったくときめきがない。

——でもそんな贅沢を言っていられる立場でもない。

そう思った私は、隅に置かれた飲み物コーナーに行き、紙コップに注がれたドリンクを取って室内を眺めた。

男女どちらも、きちんとした服装の人もしれば、普段着に近い人もいる。今まで参加した婚活パーティーでは、皆ドレスアップしていたり、フォーマルな装いだったから、今日みたいにカジュアルなのは初めてだ。ただし「結婚したい」という欲求をギラつかせているのは同じだ。

その中で、私と同じく壁の花になっている男性がいた。私と違って容姿も本当に「花」のような人が。

仕立てのいいスーツは綺麗に体に馴染み、ビスポークなのだろうとわかる。すらりとした長身は腰の位置が高く、脚の長さが窺い知れる。理知的な顔立ち、下手に加工した写真より綺麗だった。

そこにいるだけで絢爛な雰囲気が出るような華と艶のあるその人は、いろんな意味で浮いていた。そして個人情報保護とやらで持ち出しできない参加者一覧を見るまでもなく、私は彼のことを知っている。

彼の名は氷高琳。小学校の時に私の三学年上だった。幼馴染といえるほど親しくはないが、整った顔立ちに成績優秀、運動神経よしの優等生な彼は、別の意味でも有名だった。

彼の父が、幕末からこの一帯を支配している任侠集団——要するにヤの付く方々、不知火組の顧問弁護士だからだ。そのため、氷高琳は周りからは遠巻きにされていた。

本人には何の責任もないのに、親の職業——ですらなく、その取引先という、彼にはどうにもできないことが理由で、敬遠されている。

そういうわけで、当時から自分も家のことで雁字搦めだった私は、彼に一方的な共感を覚えていたのである。集団登校で、出発時刻まで一人ぼつんと立っている彼にくつついて——さすがに手を繋ぐまではしなかったが、並んで登校した。

放課後は、私は両親が多忙、彼は家庭の事情とやらで学童に入っていたから、そこで

宿題を教えてもらったりして、他人以上幼馴染未満の関係を築いていたと思う。でも、彼が中学受験して全寮制の超難関校に進んで以降は会ったこともないので、現在の関係は限りなく他人に近い。

そんな彼がここにいる理由——あの容姿なら引く手数多だろうに、どうして婚活パーティーに参加しているのかと思った時、目が合った。

私のこと覚えてるかなあ、と思いながら軽く会釈すると、彼は流れるような足取りで私の方に向かってきた。

「……穂積？」

「はい。お久しぶりです、琳く……じゃなかった、氷高先輩」

思わず昔のように「琳くん」と呼びそうになって訂正した私に、彼は苦笑した。

一応は妙齢の男女、呼び方の区別はしなくてはと思ったただけなんだけど。

「琳でいいよ。それにしても久しぶりだな。十五年ぶり……くらいか？俺が卒業してから会ってなかったと思うけど」

「そのくらいになりますね」

彼の、まっすぐに相手の目を見て話すところは昔のままだなあ、と思う。

漆黒の中に藍を一滴落としたような綺麗な瞳が、私を見つめている。

「穂積も、結婚相手を探してる？」

「そうでなければ、どうして私はここにいるんですか」

「サクラかな、と。若くて綺麗な子を一人や二人、入れるもんだろ」

さらっと「綺麗な子」なんて言えちゃうあたり、彼は社交性も高いらしい。褒められるのは嬉しいけれど、私は十人並みの容姿だと思う。

「それなら琳くんもじゃないですか？ 長身イケメンをサクラにするのもありそうです」

「穂積。昔の呼び方なのに敬語という半端な話し方はやめてくれ。あと、お互いを褒めるのもむずかしいからやめよう」

「なら、琳くんも名前で呼んで」

「……自分で言っておいて何だが、ここで名前で呼び合ったらカップル成立したと思われないか」

その懸念はもつともだ。が、正直、私も彼もここでは浮いている。彼は場違いなほどの華やかなオーラで。一方私は——残念ながら、この場の参加者は、皆さま私の素性をご存知のようだ。地元からは少し離れた自治体が主催だというのに、何人か顔見知りがあったから仕方ない。

「まあ、こうして話し込んでる時点でそう思われてるかもしれないけどな」

「カップル成立は、最後にお目当ての人を書くんじゃないかった？」

「美月は目当ての男、いる？」

不意に、琳くんが耳元で小さく問いかけてきた。最高級の蜜のようにとろける声は、もしかして声優でもやっているのかと思うほどに艶っぽい。

そんな声で、耳元で名前を呼ばれると心臓が騒がしい。子どもの頃は、琳くんは変声期前の綺麗なボーイソプラノだったから、尚更だ。……だから、私がドキドキしているのは、昔とのギャップゆえだと思う。

「殆ど父親世代の男性にときめきは感じないかな……」

私は父が二十代前半の頃にできた子なもので、四十代はもう父親世代である。そして男性参加者は三十代後半から四十代が圧倒的だ。二十八歳の琳くんがおそらく最年少だろう。

「じゃ、抜け出そう。俺もめほしい相手がいらない」

「結婚は妥協ですよ、琳くん。話してみたら意外と……」

「そう言い聞かせてる時点で『意外と』は起こらない。——ところで、近くに和菓子の美味しい店があるんだけど」

「……お供します」

私は神社の娘のせいかな、洋菓子よりは和菓子に触れる機会が多かった。なので、本当は洋菓子の方がつられやすいのだけれど、「美味しい和菓子」にはなかなか出合えない。

昔からの馴染みのお店くらいしか知らないもので、こういう新規開拓の機会は逃したくない。

「美月は変わらないな。子どもの頃も、おやつに出るクッキーより草餅を喜んだ」

「どうしてそんなこと覚えてるの！」

突然昔の話を持ち出されて真っ赤になって抗議した私に、琳くんは優しい声で残酷な事実を告げた。

「俺の分を取られたからだよ」

「それは……大変な失礼を」

頭を下げた私に、琳くんは小さく噴き出した。

そして主催の人に断って、得るものもなかった婚活パーティー会場を二人で後にする。途中で帰る人はよくいるのだろう、退席欄にチェックを入れるだけで抜け出せた。

初秋の街は、人通りはそこそこある。私は綺麗な薄いピンクのアンサンブルを着ていたが、それだけで少し肌寒い。琳くんもコートは持ってきていなかったようで、「寒いな」と呟いた。

「歩いて行くつもりだったんだが……タクシーを使うほどの距離でもないし。だけど寒いだろ、美月」

「うん。でも、歩いてれば少しは暖かくなるかも」

「暖かくなる前に着きそうだけだな」

そこまで遠くないぞと言って、琳くんは私の手を取った。

「え、琳くん……？」

「何か、はぐれそうだったから」

動揺する私に小さく笑って、子どもの時も手を繋ぎたかったけど、と琳くんは言葉が続けた。

「俺と仲がいいとか噂されたら、美月が困るだろうなと思ったから」

「それはね。困ったと思う」

「否定しろよ。少しは俺の気持ちを考えろよ」

「でも私、昔も琳くんにくっついてたから言われてたし」

「え」

琳くんの懸念は的中していた。氏子の方々からそれとなく苦言を呈されたい父が私に琳くんとは距離を取れと言ったのだから。

そこを通りがかった祖父に「親の職業で子を差別する気か！ 弁護士は立派な職業じゃろうが！ それとも何か、おまえは相手が堅気でなければ官司の務めはできんとも言うのか」と思い切り説教されていた。

祖父の信念は立派だと思う。しかし、そんな立派な祖父を持ちながら、悲しいことに、

子どもの頃の私が琳くんにくつついていたのは彼がひとりぼっちだったからではない。単に綺麗な顔を見ていたかったからである。それと、「親の職業（琳くんの場合は取引先だけ）で苦労している同志」という一方向的共感。決して、心優しいあたたかな理由ではない。

「今も、地元の人に見られたらまずいか？」

「うん。相手が琳くんだから、とかじゃなくてまずい。『穂積さん家の美月ちゃん、男の人と歩いてた』があつという間に広まる」

神社の娘には、清らかで穢^{けが}れのない乙女でいてほしいらしい氏子の皆さまのおかげで、私はこの歳になっても浮いた噂は一つもない。何故なら、どれも浮かぶ前に叩き潰され、沈められてきたから。

「あー……神社の方の」

「うん……」

遠い目になった私の答えに、琳くんは少し思案するような表情になって、

「その方が……」

「身辺調査されても……」

とぶつぶつ呟き始めた。

「琳くん？」

「……あ、着いた。ここだ」

そう言って、一軒の家の前で立ち止まった。看板もないし、古民家風でもない。どう見ても一般住宅なお家なのだけ。

琳くんはインターホンを押し、「氷高です」と名乗った。すると、ゆつくりとドアが開いた。

「お久しぶりねえ」

五十路ほどに見えるふつくらした女性が優しく笑う。

「ご無沙汰してます。今日は、やってます？」

「ええ。お連れの方がいるのね、いつものお席にどうぞ」

常連らしい会話をしながら、琳くんは女性に軽く頭を下げた。私もつられてお辞儀をする。

「お店のお客様なのに、そんなに畏^{かしこ}まらないで」

女性は楽しげに笑っている。琳くんは「入りますね」と言って、家の外壁と塀の間の細い道を進み始めた。

「……琳くん？」

「裏手の離れで営業してるんだ。だから紹介された人しかここに和菓子屋があるなんて知らない」

「ふうん、そうなんだ。一見さんお断り？」

「いや、単にはあちゃんが作れる量の問題」

そんなに緊張しなくていいよと笑って、琳くんは私の手を引いていく。細い道を抜けると、もう一軒、家が建てられそうなほど広い庭に出た。庭には桜、桃、梅、楓などたくさんのお木が綺麗に植えられていて、今は楓が赤く色づき始めている。

木々で囲むように建てられた東屋風の建物、それから小さな蔵があった。三つの入り口がある東屋からは、庭が一望できるようになっている。

「……この建物だと、雨の日はお休み？」

「ああ。それと風が強い日も。——注文してくる。美月、団子と餅と焼菓子、どれがいい？」

「初めてなので、琳くんのお勧めで」

「了解」

先に東屋風の建物に入ると、それぞれの入り口沿いに置かれた椅子とテーブルの一つに私を座らせ、琳くんは離れに「ばあちゃん」こと店主さんに注文に行った。店主さんがここにいる時なら対応してくれるそうだけど、蔵で製作中の場合は注文に行く形になるらしい。

お茶はセルフサービスだと言うので、私は琳くんと自分の分を淹れることにした。和

菓子なら抹茶が妥当だけど、琳くんが何をオーダーするかわからないので、緑茶にしておく。

艶のある木目が綺麗なテーブルに戻り、お茶を置いて木製の椅子を引く。昔ながらの木工細工の椅子には、落ち着いた赤の座布団が敷かれていて座り心地はいい。

少しして、琳くんが戻ってきた。片手に小さなお皿を二つ持ち、そこには焦げ茶色の何か載っている。

「先にこれ食べてろって。——お茶淹れてくれたのか、ありがとう」

「確認も取らずに緑茶にしたけど、他のお茶がよかったら言って。二杯目はそれ淹れるから」

この一杯目は我慢して飲んでいただきたいと言うと、琳くんは笑った。

「お茶には特にこだわりはないから問題ない」

そう言いながら私の向かいに座ると、お菓子の皿をすいっとこちらに押した。

「これ、何？」

焦げ茶色の蒸しパンのようなものに、黒いあんが挟まれているお菓子が一つずつ。見た目は羽二重餅に似た挟み方である。

「黒糖の蒸しカステラに、粒あんを挟んだやつ。カステラの切れ端で作ってるから見た目はあんまりよくないけど、味は保証する」

それから、と琳くんは付け足した。

「片方だけ、羊羹作った時に余った栗が入ってるってさ」

「どっち？」

「できれば美月に譲ってやりたいんだけど、これはどうやらばあちゃんにもわからないらしい」

栗が私の好物だと知っている琳くんは、くくっと笑いを噛み殺している。

「栗羊羹は注文してやったから、ハズれても我慢しとけ」

「うん」

しかし羊羹の中に入っている栗とあんの中にゴロッとくるまれた栗とでは微妙に食感と味わいが違うので、私は両方いただいてみたい。

そう思いながら、渋い茶色のお皿を取り、添えられていた漆の和菓子切りですつとカステラもどきを切った。……手応えが優しいので、栗は入ってなさそうである。

少し残念に思いながら口に運ぶと、濃厚なものにしつこくない黒糖の味と、優しいあんの控えめな甘さが広がる。一言、「美味しい」と言うしかない味だ。

琳くんも食べ始めていて、切った時の感触でわかったのだろう、あちらに栗が入っていた。

「ごめん、こっちに栗だ」

「それは次回の楽しみにしておくからいい。……美味しいね、これ」

「ばあちゃんは上生菓子みたいな上品なのは作らないから、茶道の方には知られてないけどな。知ってる人は知ってる」

「琳くんは誰に聞いたの」

「顧客の土産——あ、俺、今弁護士やってるんだ。親父のこのイソ弁」

「いそべん？」

「居候弁護士。まあ、雇われてるみたいなもの。だからあんまり難しい案件は扱ってなかったんだけど、依頼人が律儀な人でさ。ここの詰め合わせをくれて……あまりにも俺が美味しい美味いと喜んだもんだから、紹介してくれた」

「……弁護士のコールなイメージぶち壊したんだね……」

そしてこの「ばあちゃん」と意気投合して、常連になったらしい。

「人情派弁護士もいるだろ。——あ、ばあちゃん、こっち」

ばあちゃん、と呼ぶには申し訳ないほど背筋の通った姿勢の、七十歳くらいの女性が庭を横切ってこちらに向かっていているのを見て、琳くんはすつと立ち上がった。私に軽く合図すると、そのまま女性の方に歩いていく。

何事か談笑しながら、琳くと「ばあちゃん」さんは私の前に和菓子を並べてくれた。

「ばあちゃん、こっちは穂積美月さん。穂積神社の娘で、俺とは幼馴染……かな」

「はじめまして」

「はい、はじめまして。紀野^{きのの}房子^{ふさこ}です」

「っこり笑って、房子さんはお菓子の説明をし始めた。

「こっちが栗羊羹。栗は丹波^{たんぱ}産。ただ形が良くないっていうんで安く譲ってもらってますよ。これは黒糖あん^{あん}と苺の大福。黒糖はあたしの実家の手作り。あとは草餅と団子があるけど、一気には入らないでしょうから、お持ち帰り用に包んでおきますね」

「はい、ありがとうございます」

確かに一気に羊羹と大福、草餅と団子はお腹的にきついので、お持ち帰りは嬉しい。家に帰ってもこの甘味があると思うと、思わず笑みがこぼれそうになる。

「じゃあ、俺もいただこう」

琳くんが向かいに座り直したので、私たちは栗羊羹を食べ始めた。房子さんは私たちに会釈して、作業場に戻っていく。それを見送りながらお菓子をいただいていると、琳くんがじっと私を見つめた。

「な、何？ 私、何か変？」

「いや、そうじゃない。美月、食べ方が綺麗だなと思って」

「そうかな？ 普通じゃない？」

琳くんの方こそ、綺麗な所作で食べていると思う。

「お茶か何か習ってた？」

「習ってないよ。でも、母がお箸の使い方には厳しかったかも」

正確には、母だけでなく両親も祖父母も、我が家の大人は全員揃って作法に厳しい。

「なら、お母さんに感謝した方がいいぞ。箸使いは基本中の基本だから、それがきちんとできる人はこういう和菓子も綺麗に食べられる。ばあちゃんの受け売りだけど」

「でもこれ、菓子切りに慣れてなくても食べやすいように作ってくれてるよね？」

私の言葉に、琳くんは一瞬間食らった顔をして――破顔^{はげん}した。

「ばあちゃんが好き。食べやすい美味しい和菓子、が生涯目標らしいから」

ぼろぼろこぼしながら食べるのは、本人がいちばん恥ずかしい。そんな「美味しいけど食べづらい」なんて理由で敬遠されるのは嫌だから、するっと切れるように薄めでやわらかい生地、しつこくくっつかない餅や求肥^{もうちひ}をと心がけてはいるそう。食べる方としても嬉しい気遣いだ。

「俺にはわからなかったんだけどな。美月はわかるんだ」

「そりゃ、菓子切りを使わずに一口で食べられる男の人にはわからないと思うよ」

「いや俺も羊羹は切るから。一口は無理だから」

「大きさだけじゃなくて、力の入れ具合もだよ。なかなか切りづらいお菓子もあるけど、房子さんのお菓子は力を入れたり角度を調節しなくても、すっと切れるもの」

羊羹を食べ終え、大福を食べる時も綺麗に切れた。菓子切り自体がいいものであると同時に、切りやすく作ってあるのは間違いない。小さな頃からあちこちの和菓子を食べてきた私は、それだけはわかる。

来客用に注文しておきたいくらい美味しいけど、実家と馴染みの和菓子屋の付き合いというものもあるので、迂闊なことはできない。家族用、もしくは私の息抜き用のおやつを時々買わせていただくのがちょうどいいだろう。

「あっ」

「どうした」

私が声を上げると、向かいの琳くんがきょとんとして問いかけてきた。無防備な表情がいつもより幼く、それでいて可愛らしく綺麗で眼福です。

「房子さん、作業場だよ。お支払いはどうすれば」

「ああ、それなら代金は嘉穂さん——玄関にいた人な。ばあちゃんの息子さんの奥さん。あの人に預けていくから」

「私の分、いくらになる？」

「色々な事情から、美月の分も俺に払わせてほしい」

「でも、奢られる理由がないんだけど」

「まあ、十五年ぶりの再会を祝して、ということ。それに払うといっても、美月はこ

この値段わからないだろ」

「そうだけど……お土産というか自宅用に買って帰りたいし」

「おまえは本当に食い気だよ……」

作り置きのと菓子セットなら嘉穂さんに言えば用意してくれると琳くんが教えてくれた。帰りに購入させてもらおうとうきうきしていたら、琳くんが苦笑する。

「わかった。お勧めを詰めた贈答用を買ってやるから奢られろ」

「どうしてそんなに奢ることにこだわるの」

「俺が連れて来たんだし。連れ出したのも俺だし。そういう諸々の事情」

「うーん……」

妙にはつきりしない琳くんの「事情」とやらは気になるものの、この和菓子は欲しいという欲求が勝った私は、受け入れることにした。

「それじゃあ、ご馳走になります」

「ん。——ところで、大福を堪能してるところ悪いけど」

小さめだけど完熟した苺が黒糖を使った粒あんで包まれ、薄い求肥でふんわりとくるまれた苺大福は絶品だった。果物とあんの種類の違う甘さ、口の中が甘味一色にならないように求肥のやわらかさともっちりした食感もたらず調和。美味しい——

至福のひとつときを味わっている私を、琳くんは真面目な顔でじっと見ている。何だろ

う?」と思ったら、彼は突拍子もないことを言い出した。

「あんなパーティーに参加してたくらいだから、美月も結婚したいんだと思うけど——結婚を前提に付き合わないか?」

「……誰と?」

「俺と」

母大福を飲み下し、房子さんが淹れてくれた番茶で口の中をさっぱりさせた私は、琳くんを凝視した。

……顔と声はどうしようもなく私好みである。性格も、記憶する限り好感を持てる。

ただ、居候^{いこう}弁護士とは言っていたけど、琳くんのお父さまが経営しているなら、不知火組との関わりは今もあるだろう。とはいえ、そこでずつと働かなきゃいけないものでもない……はず。

「……琳くんは、将来お父さんの跡を継ぐの?」

「弁護士を続けるかって意味なら続ける。ただ……美月が懸念してることは俺も避けたいと思ってる」

私のはつきりと口にしなかった質問を、正確に把握して琳くんは答えた。

「あと、うちの親と同居とかはない。親父は将来おふくろと一緒にいる介護ホームを契約済だ」

「……それなら、うん……前向きに考えるというかお受けしますけど……」

私にとってはとても条件のいいお相手である。

「ただし、婿入りさせてほしい」

「ごめんなさい、お断りします」

「一息で即答するな。断るにしても、前向きに考えてお受けしますって言った舌の根が乾くまで待てないのか」

呆れたような顔で私に突っ込む琳くんだが、呆れたいのは私の方だ。こんな提案をするために私を餌付けしようとしていたのか、この男。

「だって、待ってたら確定させられそうだし!」というかどうして婿入り!? 普通は私が嫁ぐものでしょ!」

「美月、穂積家の一人娘じゃないか。婿取りしなきゃお家断絶だろ」

お家断絶、と言われるほどの家ではない。たしかに神社の格式は高いけど、宮司^{ぐうし}は父方の親戚に譲ることもできるのだ。ただ、私という本家直系の娘がいるから、婿取りを望まれているだけで。

「宮司^{ぐうし}の仕事は叔父や従兄弟がいます! 琳くんが婿入りしなくても……っていうか、今から宮司^{ぐうし}の資格取って、弁護士やめるつもり?」

「お義父^{とや}さんに頑張ってもらえばいいだろ。定年のある仕事じゃないんだから、俺たち

の息子が宮司になるまで」

「付き合う前から子どもの未来を盾に婿入りしようとしなくて！ 子どもに負のローンを残さないで！ 少なくとも私は、自分の自由のために誰かを犠牲にするのは嫌なの」

「その場合、俺が犠牲になって可哀想だろ」

「なら無理に私と結婚しなくてもいいんじゃないかな……私は、子どもにも自分で将来を決めてほしいし」

呆れるを通り越して脱力した。この男は、自分の血を引く息子が可愛くないのか。

「そう言わず、俺の事情も聞いてくれ」

少し温くなった番茶をごくごく飲んで、琳くんはおもむろにこう言った。

「このままだと、俺は親父の跡継ぎにされる。三男なのに」

「あ、二人もお兄さんがいるのね」

「いる。けど、二人とも『琳が弁護士になりなさい』『人を助ける素晴らしい仕事だ』

と幼い俺を騙して自分たちは海外勤務のある職業に就いて逃げた」

父の跡継ぎ＝不知火組の顧問弁護士を「押しつけられた」と気づいたのは、二番目のお兄さんの海外転勤が決まって「すまん。おまえが憎くてこんなことしたんじゃないんだ。だが俺はおまえより俺が可愛い」と言って逃げた、中学入学前の春だという。

「……我儘なのは血統なんだね……」

「さらつと俺を我儘扱いしないでくれ」

「我儘だよ。我儘の世界大会に出ても準決勝まではいけるくらいには我儘だよ」

何せ、お父さまの跡を継ぐのを回避するためだけに、生まれてもない息子の未来を売り飛ばし、私に愛のない求婚をするくらいだから。

「あのな、美月。いたいけな中学入学前の少年が、父親に連れられて得意先回りさせられて、その場でニコニコと『将来金に困ったらいつでも言ってくださいね、氷高先生のご子息にならいくらでも用立てます』なんて言われてみる」

ちなみに彼らの世界では、五十万貸して三百万円回収したら一人前なんだぞと言われ、私は引きつった笑みを浮かべた。

「法定利率無視ですか……」

「無視というか、返済してる側が麻痺するんださうだ。もちろん、きっちり返済計画立てて返す人もいるけど、毎月決まった日に決まった額を返済するのが何年か続くと、それが習慣になるらしくてな。で、受け取った方は完済通知を『普通郵便で』送ったことにする。そして何故か起こる郵便事故により、それは借りた人に届かない」

そして借りた人間は、いつまでも完済通知が届かないから、ずっと払い続ける。貸し付けた元金と利息を超えた分は「寄付」として処理し、キリのいいところで「完済しました」と電話してやるのが「優しさ」ださうだ。

「怖……」

「けど、明日どころか今日食べるものもない人たちにも貸し付けてたから、感謝はされてるらしいんだよな。仕事も^{あっせん}斡旋してやるらしいし。もちろん返済させるためだけど」

人情派なのか何なのかわからん、と呟いた琳くんの言葉に心から同意した。優しいのか怖いのかわからない。ちなみに今は法定利息の上限を守っているらしい。

「そういうことで、俺は婿入りできる相手と結婚したくて婚活してたんだが」

弁護士という職業は人気なのだけれど、イソ弁の琳くんはそこまで高給なわけではなく知った女性たちは、更に琳くんが「父の事務所を継ぎたくないから婿入り希望」だと聞くとさーっと離れていくらしい。

「もしくは、婿入り希望なんて何か理由があるんじゃないかと疑われる。もちろん凶星で理由ありまくりだから、興信所入れられたらうちの事務所と不知火組の繋がりがバレて即お断り」

「大変だねえ……」

「で、美月が俺の婿入りを嫌がる理由は？」

「私は神社を継ぎたくないの」

私が端的に答えると琳くんは大福をばくりと一口で食べて——いくら小ぶりだからって、確かに私でも一口で食べられる大きさだけど、それができるのは男の人だからかな

——続きを促す。

「……だって、お祓いとか怖くて」

「そうかお祓いが怖いのか。……って何だ、おまえは悪霊か？」

「違う！ 憑いてるモノが怖いの！ それを平然と受け取ってお祓いして供養してるお父さんやお母さんが理解できないくらいに怖いの！」

「だから学童の夏休みイベントの肝試しは絶対参加しなかったんだ……」

ふむ、と納得している琳くに、私は言葉を重ねた。

「そういうわけですから、私は嫁入りしてあの家を出たいの。残念だけど琳くんのご希望には添えません」

「結婚は妥協だつて言ったのは美月だろ。——じゃあ、こうしよう。俺もそろそろ『お相手がいないなら、うちのお嬢はどうです？』と言われるのは怖い」

聞くと、どうやら以前より不知火組の組長さんのお嬢様との縁組を打診されていて、いよいよ切羽詰まっているらしい。

「付き合って、惚れた方が負け。相手の希望どおりに婿入り、または嫁入りする」

「何故私がそんな意味不明な賭けをしなくちゃならないんですか。私は地道に、嫁入りさせてくれる人を探すの」

「地道に探しに來たのが今日のパーティーだろ。失敗してたじゃないか」

図星なので反論できない。弁護士サマは洞察力も記憶力もよろしくて羨ましい。「俺と同じで、美月ももう後がないと思ったからあんな地味な婚活パーティーに参加したんだと推測した。おまえ、現時点で友人知人系の知り合いは全滅してるだろ」

淡々と告げる琳くんの言葉は、実感がこもっていて——私は同じ境遇なだけにその重苦しさがわかってしまう。

「それに、俺、結婚してもいいかなってくらいには美月のこと好きだし」

「あ、私も結婚して毎日鑑賞したいなってくらい琳くんの顔は好き」

「いいこと言った！　みたいな顔して言うな」

「だって、性格は最高に我儘^{わがまま}というか、自分最優先だとさっき知ったもので……」

私の反論に、琳くんは「圧がすごいんだよ、不知火の人たちは……」と遠くを見つめながらお茶を啜^{すす}っていた。

深藍の瞳には、房子さんが丹精こめているらしい庭の景色が映っていて絵のように綺麗だ。

「まあ、美月も結婚してもいい程度に俺の顔が好きなら、問題ないだろ」

そういう問題かなあ……しかし、私も本当に後がないのは事実だ。マッチングアプリで知り合う人よりは、幼馴染未満とはいえ、琳くんの方がいい。本人とご両親を知っている、安心と信頼という意味で。

自分を納得させた私は、彼の提案を受け入れる方向に揺れつつあった。何せ琳くんはいわゆるハイスベック男子。普通は婚活市場に放流したら、女性たちが即群がってくる超優良物件だ。それを邪魔しているのは不知火組関連で、私は別にそこは気にしない。……あれ？　この提案、受けない方がもったいなくない？　上手くいけば、私の希望どおりに嫁入りできるんだし。

「んー……期限は？」

「俺の方は……そうだな、結婚前提で付き合っているとえば一年は引っ張れる」

「私も……一年くらいなら何とかいけるかな」

なら、と琳くんはバッグからパソコンを取り出して何らかの書類のフォーマットを呼び出し、入力していく。そして出来上がったものは、「結婚前提の交際書」だった。

「えーと……これ、ややこしく書いてるけど、要するに？」

問いかけた私に、琳くんは要約してくれる。

「一年後までに結婚するのは絶対。先に好きになった方が相手の要求に従う。これどうだ？」

とっても簡単な要約である。

「いいですよ、それで。あ、好きって人間的に尊敬できる人とかじゃなくて恋愛、男女としてってことよね？」

「そう。あと、好きになったら正直に自己申告することだな」

「そこは『好き』って言わせたらいいと思う。隠すのも暴くのも手腕の一つだし」

現在、私と彼の視線は熱く絡まっているが、しかし恋愛の甘さはない。

「とにかく、先に恋に落ちた方が負け！」

渡された電子ペンでサインしながら、私たちは異口同音にそう言って睨み合った。

琳くんは「婿入り希望」以外は私の希望以上の人である。何とかして嫁入り婚に持ち込みたいけど……彼の希望を無視するくらい惚れさせるって、恋愛経験皆無の私には相当なハードルだと気づいたのは、サインして帰宅してご飯を食べてお風呂に入ったあとだった。

2

私の生活は、何を置いても穂積神社が最優先である。なので、神社との両立ができないお仕事には就けなかった。神社の仕事を手伝うにしても、女である私にはできない神事もあるので、受付や参拝客の案内がメインだ。

十代の頃は巫女舞もしていたけれど……悲しいことに、巫女舞には年齢制限があるの
で今は教える側だ。こんなにも清らかな乙女なのに！ 十分に巫女の務めを果たせる
のに！

そういうわけで、在宅でできる仕事——父や氏子さんの伝手で、雑誌のコラムの仕事
をいただいている。各地の穴場神社やグルメ情報を紹介するのだけど、神社側がNGを
出さないのは、うちの神社の名前のおかげだろう。無駄に社格だけは高いから。

琳くんとは、連絡先を交換しただけで会ってはいない。次に会う時はお互いの婿入
り・嫁入りへのプレゼンと決めてあるので、その準備をしているところに、地元雑誌の
編集長から仕事の依頼が入った。とある神社が恋愛成就のスポットとして若い女性に隠
れた人気を集め始めているので、そこを取材したいらしい。

つまり、私は口添えというか「穂積神社のお嬢さん」として雑誌の信頼性を担保する
ために声をかけられたのだ。

編集長の楠浩美さんは色々お世話になっている女性だ。私は了解の旨を返信し、日時
の打ち合わせを含めてオンライン通話でやり取りするうちに、取材日も決まった。

「そうだ。楠さんに相談があるんですが……効果的なプレゼンのやり方を教えてもらえ
ませんか？」

楠さんは編集長だから、いろんな人からプレゼンを受けることも多いだろう。これだ、
と思わせるプレゼンにも詳しいかもしれない。

「プレゼン？ いいけど、美月ちゃんがやるの？ ちなみにテーマは？」

「婿入りと嫁入り、どちらがお得か、です」

「それほど『人による』としか言えないテーマもないよ、美月ちゃん……」

「ですよー」

領いて、私は自室のガラステーブルにぺたりと倒れ伏した。論理的なものでは琳くんに敵うと思えないので、情に訴えようかと思ったのだけれど、駄目だ、あいつ生まれてもない息子の将来を売るくらいには「自分が最優先」だった……！

「お相手は？」

「弁護士です。イソ弁だっって言っていましたけど、お父さまの事務所のイソ弁で、お兄さんたちは弁護士じゃないから……」

「将来はそこを継ぐ可能性が高いってことね」

ふむふむと頷いて、楠さんはにっこり笑った。

「同居にでもならない限り、相当な好物件じゃない。それなのにそこに嫁入りするのが何故嫌なのよ」

「私は嫁入りしたいんです！ 向こうが婿入り希望なんです！」

そこ大事、と熱意を込めて訴えると、楠さんは首を傾げた。

「美月ちゃん一人っ子だし、婿入りしてくれて、かつ弁護士も続けてくれるなら文句の

つけようがないじゃない」

「楠さん、私がこの家から逃げたいって知ってるじゃないですか……」

「そうは言っても仕事もご家族あつてのものでしょ？ メリットだけ受け取ってデメリットから逃げるのはよくないと思うなあ。それと、男女の関係には外野は口を挟みません」

にっこり笑うと、楠さんは別の打ち合わせがあるとやらでオンライン通話を切った。

私は小さく溜息を吐き、パソコンから作りかけのプレゼン資料を呼び出す。

ほぼ白紙である。

「……どっちのメリットが大きいかで言えば、私が琳くんを婿取りすることなのよね……」

わかつてはいる。けれどホラーが苦手、というだけではない理由もあるのだ。

母は私しか——つまり女の子一人しか子どもを産めなかった。祖父母は何も言わなかったようだけど、父が氏子さんたちに離婚して跡継ぎを作れと言われたことは数え切れないらしい。らしい、というかお酒が入った席では、私の目の前でも言われてたし。

父は母にベタ惚れなので、聞く耳持たずだったけれど。氏子さんたちが帰った後、男の子ではない自分を責めていた私を抱き締めて「美月が美月でお父さんは嬉しいよ」と言ってくれた。

だから私は、もし婿取り婚したところで、女の子しか産めなかった場合が怖いのだ。一緒にいる時なら守ってあげられる。傷ついたとわかったら慰めて、愛してるって伝えてあげられる。でも。

私がそうだったように、父や祖父の目につかないところで「清花さんの方から身を引いてはどうだ」と言われていた母のように、「美月ちゃんだって弟が欲しいだろう?」と言われた時のように、知らないところで傷つけられていたら守ってあげられない。

だから私は、この穂積神社が大切で——でも嫌いだ。

そんな思考を振り切るように、ぼーっと室内を眺める。そんなことをしても時間の無駄だとわかっていくけど……それにしても改めて見てみると殺風景だな、私の部屋。

そこそこ広い和室には、収納を兼ねたローベッドと丸いガラステーブルと座椅子、それから作り付けの本棚がある。

和室にそぐわないガラステーブルは、お気に入りのラグを敷いて、その上に置いた。足元に収納スペースがあるので、そこにいろんな資料を入れてある。

「……プレゼンで敵わないなら、惚れさせた方が勝ちっていうこの勝負に賭けるしかないんだけど……」

独りごちて、私は酔い潰れたように座椅子にずると崩れ込んだ。

自慢ではないが、この歳で恋愛歴真っ白、初恋すらまだである。友人たちのコイバナには付き合われるものの、私は「恋愛としての好き」がよくわからない。

お見合い結婚なら、相手に生理的な嫌悪感がなければいいと思うのだけれど、友人たちは「一回くらい恋愛してからでないと、結婚した後には初恋しちゃったらどうすんのよ、神社の跡取り娘が離婚も不倫もできないでしょ」と、私に「恋をしろ」と言う。

しかし琳くんを恋をするというのは論外である。もし彼に恋してしまったら、私は婿入り婚を受け入れることになる。かといって、琳くんを恋とす手腕など持っていない。まさに八方塞がりなこの状況、どうしてくれようか。

——そのあと、私はパソコンで「男を落とす方法」「恋の駆け引き百選」などを検索しまくった。実践できそうなものは少なかったけれど……いつか役に立つと信じていたい。そしてそのやけくその勢いのまま、琳くんに「そろそろデートしたいです」とメッセージを送り、「了解」と返信が来たのは……吉と出るか凶と出るか。

吉だといいなあとthinkながらも、子どもの頃からずっと御神体にお祈りしてきた私は、何かにつけて神頼みする程には神社の娘なのである。

さほどのご利益がないことは身を以て知っているし、でもそれなりに神様を信じてもいる。何もかも神頼みにはできない、というのがリアルなバランスで信じられるのだ。

琳くんとの待ち合わせ場所は、私の家から少し離れたブルーランジェリーだった。琳くん曰く、コーヒーとパンがとても美味しいとのこと。……前回もだけど、琳くんは私を「美味しい食べ物に目がない」と思っているのではないだろうか。否定できないのが正しい。

前ボタンの黒いワンピース、レースアップブーツに焦げ茶色のバッグというオーソドックスなファッションに、薄く化粧をしてブルーランジェリーに行くと、既に琳くんが来ていた。カフェコーナーで人待ち顔でコーヒーを飲んでいる。

店内の女の子たちからマダムまで、女性陣の視線を独り占め状態の人に声をかけるのはなかなか勇気があるなあと思うながら、私は彼の座るテーブルに近づいた。

「琳くん」

「ごめん、先に飲んでた」

いや、お酒の席じゃないからそれはいいんですが。

「パンはいくつか美月の好きそうなのを注文してる。テイクアウトにしたから、外で食べよう。美月、何か飲む？」

「えっと……カフェラテ。アイスで」

店員のお姉さんにオーダーし、琳くんはこのあとの予定を話し始めた。

「プレゼン用にコワーキングスペース借りてるから、そこで話し合い。そのあと、食事って流れでいい？」

私たちのデートは普通のデートではない。如何に相手に自分の要求を飲ませ、譲歩させるかのプレゼン合戦でもあるのだ。

「うん」

私が持つて来たのは、交流のある神社の娘たち（*mo* 跡取り含む）から聞き込みした不自由さだ。メリットもあるのでそれも入れた。そこは公平にしないと説得力がなくなる。

琳くんがノートパソコンを持つて来ると事前に聞いていたので、プリントアウトのほかにデータも一応USBメモリに入れてある。結構頑張って作ったけど、あちらは弁護士。弁論を以て依頼人の利益を守るプロだ。……何か勝ち目がない気がする。

ちよっと弱気になりかけた自分を鼓舞し、アイスカフェラテを飲んで——豆にこだわっているだけでなくミルクが違うのか、すごく美味しかった——私は立ち上がった琳くんの後を追ってコワーキングスペースのあるオフィスビルに向かった。

琳くんが借りたというコワーキングスペースは打ち合わせ用のもので、会議室のよう

に区切られていて、防音設備も整っているらしい。エレベーターホールの近くで飲み物を買った私たちは、利用者パスをもらって指定された部屋に行く。……あとで使用料を半分払わなくちゃ。

「……どっちから始める?」

「私から」

会議用のデスクに向かい合わせて座った琳くんの問いかけに食い気味に答えると、くすつと笑われた。笑うなら笑ってくれていい、とにかく私はあの家を継ぎたくない。

「じゃあ、どうぞ。穂積神社、穂積家を継ぐデメリットは?」

「まずこれを見てほしいの。同じ『神社の娘』たちに聞いた率直な意見」

私はプリントアウトしておいた紙をファイルから取り出して渡した。

「神社を継ぐデメリット——恋人とクリスマスが祝えないし、クリスマスプレゼントももらえなかった。巫女舞が疲れる。正月は初詣客の対応で多忙すぎる。御弓取りで全身が死ぬ。流鏑馬は命懸けになりやすいが迂闊に廃止もできない……最初の答えは怨念がこもってるな……」

「普通に『クリスマス』としてケーキを食べたりする家もあるんだけど。うちは駄目だから」

「ふうん……けど巫女舞が疲れるとかそういうのは俺には関係ないな。巫女じゃないし。

御弓取りも流鏑馬も氏子から選ばれるんだろ?」

ちっ。気づかれたか……というか、情報収集してたんだ。私はいえ、琳くんの方の情報収集を一切していないから不利だと今更思い知った。

「お正月が大変なのは宮司もだからね?」

「おみくじや破魔矢、お守りなんかを売る巫女もどきのバイトの方がよっぽど大変だろ」

「な、何故そのことを……」

お正月は巫女舞の子たちが手伝ってくれるのだけど、販売係の巫女役は忙しすぎる上に若い女の子目当てのおじさんがいたりするので、くじ引きで強制しなくてはならないほど忌避されている。

「……プレゼン合戦なんだから、多少は相手の様子も調べとくもんじゃないか……?」
呆れたように言くと、琳くんは続きを読み始めた。

「メリット。……利点も書いたのか」

「そこも書かなきゃ不公平じゃない」

「美月は変なところで平等精神出さなあ……氏子さんから敬われるけれど、その分言動を常に見られている閉塞感がある生活。おかげで面接や営業程度で緊張することはない。……これはメリットか?」

「琳くんは弁護士なんだから緊張しないっていうのはメリットでしょ？」
度胸が鍛えられるというのは結構なことだと思った私に、琳くんは今度こそ本気で呆れた視線を向けてきた。

「俺の職業はともかく、顧問契約先わかってる？」

「あ」

「顧問は親父だけど、俺も不知火組の人たちと話したりすることはあるんだ」

「……」

確かに、そちらの方々と交渉したりしているなら、四六時中「見られている」程度で緊張感などないだろう。

「というわけで、この点は俺が婿入りする際のメリットにはならない」

「はい……」

「さっきのデメリットも、俺からしたらデメリットというほどのものじゃない。緊張感や閉塞感のある生活っていうのはな、美月」

「うん」

「いつ親父が『引退するから顧問契約先を全部譲る』って言い出すかわからない毎日を過ごすストレスフルな俺の生活だ」

確かに。淡々とした口調にもかかわらず、琳くんのその言葉にはすごく説得力が

あった。

「俺が婿入りしたら、まあ宮司の仕事はお義父さんに頼むとして」

「さらっと『おとうさん』呼びしないで」

「巫女舞とかは若い女の子が必要なんだろ。この顔で、三人四人五人くらいはすぐ引っかけてきてやる」

更にとんでもないことを言う琳くんに、戦慄した。確かにその顔なら女の子は引っかけ放題でしょうけども！

「クズがいる……！ 清らかな子じゃないと駄目なんですけど！」

「元クライアントに女子中高生もいるから心配するな」

「犯罪……いやロリコン……」

「守秘義務があるから詳しくは言えないが、そんな色恋に現を抜かす余裕なんかなかった子たちばかりだ」

「……ごめんなさい」

反省して項垂れた私に、琳くんは頷きながら続けた。

「だからその問題が解決した今はめっちゃ遊んでる。未だに俺に連絡してくる」

「ねえほんとに弁護士として恥ずかしいことはしてない？ 信じていいの？」

「それに、俺なら氏子から持ち込まれる私的な相談に法に基づいた回答をしてやれる。」

——結構多いんだろ、そういう仲裁役を依頼されるのは」

「うん……」

これは事実で、私たちの元には氏子総代さんを通じていろんな相談が持ち込まれる。氏子さん同士の揉め事は総代さんが何とかしてくれるんだけど、たまに「無理です、すみません」と言いたいくらい拗れた話を持ち込まれて、お父さんが頭を抱えている。

もちろん人間だから義理や人情で納得してもらえることもあるけど、法的にどうなんだろうという場合もあるから、弁護士琳くんがいるとありがたい……って駄目、流されちゃ駄目、私は穂積の家を継がずに嫁に行きたいんだから！

「危うくそれなら琳ちゃんと結婚した方が困らないと洗脳されるとこだった……」

「洗脳と言うな。俺が婿入りしたらデメリットもメリットに変えられるって話したただろうが」

「はいもう終わり！ 次回はもっと詰めてくるから！ 琳くんのプレゼンどうぞ！」

私はやけくそになりつつ、次回はきちんと資料を作り込もうと決意して琳くんのプレゼンを促した。

「俺のプレゼンは、うちに嫁入りしたらどうしたって不知火組との関わりが深くなるし、下手したら命は狙われなくても誘拐とかの危険があるってこと。婿入りしたら俺は親父の事務所から離れるから、どっかのイソ弁から始めるにしてもいずれは事務所開けるく

らしい資金はある」

「え、琳くんお金持ちなの」

「弁護士収入は平均値だけど、母方の祖母から不動産をいくつか生前贈与されてるから不労所得がある」

この外見と代々弁護士という家庭環境と頭脳に加えてお金持ち。勝ち組は生まれた時から勝ち組なのね……

「美月」

「はい？」

うちは神社の格式は高いけど、それだけだ。他のやり手神社のように、学校や病院を経営しているような手腕はない。よって財産は、神社の敷地奥の家と、参拝客のための近くの駐車場くらいのものである。

不動産にはそれなりの価値があるのだろうけど、先祖代々の土地だから売るわけにはいかない。お金に困ってはいないけど、セレブというほど裕福でもない……と思う。

なので、勝ち組いいなあと思っていたら、琳くんが私を呼んだ。やわらかく響く彼の声は、私の耳に幸福感を与えてくれる。

「プレゼン合戦するより、俺は美月とデートしたい」

「……急にどうしたの？」

「今までの流れでわかった。……おまえ、プレゼンしたことないだろ」
びくつとわかりやすく動揺した私に、琳くんはあ、と溜息を吐いた。

「そういう相手とプレゼン対決して勝ったところで俺がずるくて卑怯な男になるだけだし。それなら、最初の約束どおり、相手を惚れさせることに注力する方がまだ公平だ」
「う……」

確かに、確かに私はプレゼンなんてしたことがないけど！ 仕事の企画書や提案も文書でのやり取りばかりだったし。

だけど、いきなりデートと言われても。

「琳くん……私、その、恋に落とすためのデートなんて知らないんです……」

「俺も知らない。だから公平だろ」

そう……なんだろうか。

恋愛に疎い私が内心首を傾げていると、琳くんはデスクの上を片づけ始めた。

「ちょっと予定より早いけど終わろう。慣れないことさせた詫びにパンは全部譲ってやるから食事に行くか」

「慣れないこと？」

「プレゼン。……俺も上手い方じゃないが、まさかあそこまで下手くそな初心者だとは思わなかった……」

「だって初めてだったんだもん！」

「何か誤解されそうな言い回しはやめてくれ」

琳くんは書類やパソコンをアタッシェケースに片づけると、すっと立ち上がった。

「このあとにご飯ってデートっぽくない？ まだどうやって琳くんに惚れてもらうか決めかねてるのに、いきなりそんなこと言われても私も困るというか」

「創作中華の美味い店に連れてってやる」

「行きます！」

だってうちは和食が多いから……！

お母さんもおばちゃんも和食は得意だし、たまには洋食も出るけど、中華は酢豚かエビチリが限界なんだから……！

即答して片づけ始めた私を、琳くんは微笑ましげに見守っていた。……そんな優しい目で見られたらついときめいてしまうので、琳くんには自分の顔面偏差値の高さをもっと自覚してもらいたい。

琳くんが連れて行ってくれたお店は、ランチ営業もしているからなのか、ドレスコードは心配いらないうまいだった。赤い窓枠や竜が巻き付いた柱など、いかにも中華という感じのお店だ。店員さんの制服はチャイナドレスではなかったけど。

ランチコースを二人で頼んで、大きなアワビの姿煮や油淋鶏ユウリンチキや蟹レタス炒飯チャーハン、海老饅頭えびもちと菊花茶、更に杏仁豆腐までいただいてしまった。すみません嘘です、桃饅頭も追加オーダーしました。

美味しい美味しいと食べている私を、琳くんは微笑ましげに——見てません。彼も食べることに集中していた。ココナッツミルクプリンをオーダーしてたもの。

追加オーダーのプリンが届いた時、私たちはやっと「話す余裕」を取り戻した。

「ねえ……ここからどうやって恋に落ちるの私たち……」

これまでにわかったことは、二人とも完全に花より団子である。

「とりあえずお互い知らないことが多すぎるから、そこから埋めていこう。美月は、神社の仕事は何を手伝ってるのかとか」

「前にも言ったように巫女舞の継承と、あとはおみくじとかの販売。それとお祓いなんかの受付」

巫女舞を舞う子は、氏子総代さんの紹介で常に五〜六人ほどいる。新しく入ってきた子に基本を教えながら、ずっと舞ってくれている子——といっても長くて六年くらいだけ——にも、装飾品やお道具を持つての舞を教えたり。

幸い、神社の節目になるお祭りはこの先数十年はないので、取り立てて難しいことはない。

「喧嘩になったりしない？ あとから入った子の方が上手いとか」

「それはある。明らかにセンスのいい子っているから。けど、序列を飛び越えると総代さんの顔を潰すし、親も絡んでくるから、巫女舞する子はそのところはわかってくれる」

本当に、その点は救われている。親から言い含められているらしい彼女たちは、中高生ながら自分たちの役割を理解してくれる。時々「ねー美月ちゃん。ここで巫女舞したら結婚の時に印象良くなるってほんと？」と聞かれても答えられないのがつらいが。

「琳くんは？」

「俺はしがないイソ弁なので。親父が振ってくる案件をこなすだけ。自己破産とか相続問題とか離婚とか」

「そっか」

不知火組関連のことはお父さまだけが対応するらしい。

「あとは三十分の無料法律相談に出かけたり……かな。管財人の仕事とかもしてるけど、あくまで俺は一般人の法律相談しかしてないから、親父みたいな地面師じめんし相手の詐欺案件とかはやったことない」

それは、そういう方面に不知火組さんが絡んでるからだったりしないよね……？